
あかね色～学校記録～

mmomdp

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あかね色ゝ学校記録ゝ

【Nコード】

N3518V

【作者名】

m m o m d p

【あらすじ】

日記を書いている少女の日常を描いています。学園生活を中心に細々とした事件が起きるかもしれない。何にも起きないかもしれない。もしかしたら大事件が起きるかも。なんて、不確定要素だらけです。基本的には超能力とか特殊技能とか、その他設定が何もないのでまったりした展開になるかもしれません。というよりなるでしょう。（、）マターリ

睡魔ゆえ仕方なし

私もめでたく高校に入学することができた。入学といっても、中学からの進学、つまり、エレベーター方式での進学だ。とはいえ、中学受験はまとも塾に通い、冷や汗を垂らしながら、志望校に入つたのだ。それ相応の努力はしていたと自負している。当時の志望校は東鴻^{とうこう}高校。よって、今、私が入学式恒例のイベント。ツマラナイ校長の話を聞いているのは東鴻高校の体育館となる。

「…であるからして、…を…ことをなによりも…」

あいも変わらず、校長の話というものは長い物らしく、かれこれ30分は経っているんじゃないかなと思われた。当然、集中力は切れ注意力は散漫になり、睡魔が襲ってくる。ざっと辺りを見回してみても、流石に入学式から寝ているような学生はいない。私としても、そんなことで教師から目をつけられるような事態は避けない。避けたいのだが…眠い。少しくらい目をつぶっても、眠ったりはしないだろうと高をくくり、瞼を閉じた。

「…起きろ」

まったく対応が早いね。気がつけば背後に人が立っていた。入学式の前にホームルームがあり、そこで担任と軽く顔合わせをした後に、この体育館に来ていた。その担任が立っているようだ。名前は確か「西田俊之」といつていたような気がする。漢字が違いの「西田敏行」ならば、いじり方も増えたのとき思ったが口には出していない。容姿は釣り馬鹿のハマちゃんとはまるで違い、どこぞの体育教師よろしくな引き締まった体を持ち、ツリ目ではつきりとした二重、ホリの深く、劇画漫画顔負けな鼻や口のパーツで作られ

ている。そのくせ、全て合わせてみると愛嬌があるのだから不思議である。総評するなら、何処かの新興企業のやり手社長か、警視庁のトップでもやっていそうな雰囲気だ。実態は古典の教師だが。

「やだなあ、先生。寝てませんよー」

自分でも胡散臭く感じるような甘えた声で寝ていたことを否定する。寝てはいないのだ。目を閉じて休んでいただけで、寝ていない……ってあれ。周りに人がいない。なんか壇上の片づけを開始しているし。

「……」

ハマちゃん（たった今この場で名づけた）がこつちを無言で睨み付けてくる。その視線に気がついていない振りをする。しかし、その眼力から逃れるのは難しく、じりじりと（精神的に）追い詰められてゆく。こうなる前にどうして起こしてくれなかったのかと、クラスメイトを恨みなくなるが、今はこの場を切り抜けることが重要だ。……どうしようか。

「ははは……。誰もいませんね。如何したんでしょうか？」

「今どういった状況か分かってるか？」

「……いやー。教師も生徒もハマちゃんの眼力に恐れをなしたんでしょうか？」

「ハマちゃん？」

「先生のおだ名ですよ。今決めたんです。ハマちゃんも分かっているくせに……」

出来る限り、自然な流れで会話をしながらちよつとずつ移動する作戦に出る。このときには既に席を立ち、出口に向かって歩き出し

ている段階だ。つられるようにハマちゃんも動かざるを得ないようだ。うまいこといつてるようだった。

「名づけ方はですね。芸能人の西田としゆきと名前が同じで、漢字が違うだけだからっていう単純な理由ですよ。他の生徒からもそんな風に呼ばれたりしたことあったりしますよね？だから、あだ名がハマちゃんってのは自然なことなのですよ。そんな単純に決めてもらっちゃあ困るとかいわないでくださいね？…（ペラペラ…）」

相手に話を割り込ませることなく、何とか教室まで戻れないか考えた結果がコレだった。無理があるけれども押し通すしかない。早足で歩きたいのを我慢してゆっくり歩いて教室へ戻る。1 - 5組は校舎の中でも体育館から遠い部類に入る。東校舎1階の端にある。体育館との位置関係は、校舎には東校舎と西校舎があり、正門が南口にあり、裏門が北にある。校舎はコの字型に建っていて、コの開いた部分が裏門に向いている。体育館は西校舎の西側に隣接して建っている。つまり、平面で見た直線距離ならば、どこよりも離れた教室だといえる。校舎は4階建てのため、平面では等距離でも3階にある3 - 5のほうで、階段を登る分だけ遠い。ふと「西校舎と東校舎の境目はどこにあるのだろうという考え」が頭をよぎったが、今はそれどころではなかったことを思い出し、会話に集中しなす。

「…ということもありまして（ペラペラ…）」

話を途切れさせないように会話し続けていると

「…噂どおりの生徒だな」

と、唐突にそんなことをいわれた。

「へあつ？」

変な声を出して驚いてしまったが仕方ない。噂って何のことなのだろうかと疑問がわく。しかし、このまま、話を止めると寝てたことを言及されるため、即座に会話を再開させようとした。

「あ、ああ、噂なら巷で有名なツチノコさんがうちの周辺に住み着き始めたんじゃないかって近所のおばちゃん言っていましたよ。捕まえたなら一攫千金ですよ！だから…」

「生徒の名前は早瀬遥だったか。中等部の教員で知らない人間はいないらしいな。良い意味も悪い意味も全部含めてな。何で有名かと思えば運動神経と学力と容姿と性格の全部が桁外れで無茶苦茶らしい。それが高等部に上がるから覚悟しておけと、昨日、中等部の教師がわざわざ連絡しに来てたな」

「…す、すごい人はいるものですね」

「ああ、なんでもジュニア陸上女子の記録保持者で、ジュニアサッカー代表と遜色ないサッカー実力者で、剣道は二段だが、実力だけなら大人と同等で、空手もやってるとかな。そういえば、親が元バレーボール選手とも聞いたな。相当うまいらしい。他にもスポーツ関連ならなにやらせても完璧らしい」

「…」

「だが、学業を完全に疎かにしているらしく、テストは毎回酷い点数をはたきだした。なかでも、オールクリアはすごかったと寺田が言っていたな。寝てたと本人は言ったらしいが、それでも全教科白紙で提出することをやってのけるとは、さすが桁外れの規格違いだと思ったよ」

初めからわかっていたとばかりに、私が中等部に残した傷跡を説明する。中学担任に説明を受けていたハマちゃんじゃ後が怖い。主に話が素行の面についてまで広がると怖い。それでもって、クラス

の前で何か言われたら…私の高校デビューが！（…といったことはないけれども）

「先ほどは寝ていて申し訳ありませんでした。後、しらばっくれようとしてすみませんでした」

早々と観念して謝罪する。元担任の情報提供を受けた教員はほとんど有態ありていを把握してるに違いない。今後、少なくとも1年はお世話になるのだ。ちゃんとした対応を取るべきだったと、この時になってようやく悟った。

「いや、構わない。校長の話は教職員の間でも眠る奴がいるからな」

「…そうなんですか」

「ああ、たとえば俺もそうだ。だから気にすることもない」

笑顔で高々と（駄目教師な）宣言をする。この笑顔が愛嬌になってるのかと、ぼんやりと劇画な顔立ちが暑苦しくない理由を見つけた気分になった。その宣言はこの教師大丈夫なのかと、私の今後の学園生活が心配になる反面、担任ですら面白い人だから学園生活も楽しいものになるだろうという印象を与えるのだった。

話が丁度終わるころ、クラスに到着する。入学式に眠りこけて担任に目をつけられていた女子クラスメイトが、「どんな風に叱られたのか、叱られたために落ち込んだりしているのか」と想像して待ち構えていたクラスメイトたちは、おかしなほど打ち解けて楽しそうな会話をして教室に入ってきた担任と、早瀬遥の姿を見てどうしても理解することができなかった。そのため、「美人局」とか「一夜嬢」とか散々なあだ名がついたのはこの後のことである。

ただのホームルーム…なのに

「ハマちゃん駄目教師なんじゃないかあ…」

「お前がいうな。さつき謝ったのはなんだったんだ」

「やだなあ、お互い様って分かったのなら固いことは無しってことですよ」

「あの時も。今も謝罪する気がないんだな？」

「…そうなりますね。ですが、あのつまらない話は眠って然るべきものかと思います」

「…確かにそうだったな。散々話しておいて、落ちが自分の自慢だからな…」

廊下からドアを開けてクラスメイトと担任が入ってくる。担任に失礼なことを言っているのは、先ほど体育館で眠っていた女子だ。だが、その失礼な発言も問題にはならなそうだった。担任の顔色を一瞥みただけでもわかる。

その女子の身長は女子としては大きい方に入りそうだ。目測で165〜175cm。活発で親しみやすそうな雰囲気で溢れている。取り繕わないはつきりとした男っぽい性格のようだ。単に、性格が良くみえるだけじゃない。癖がなく整った顔立ちをしている。だが、平凡ではない。個性こそ弱い、誰しもが綺麗、美しいといいそうなものだった。眉目秀麗、端正な顔立ちは何処か男性的な印象を与える。しかし、女性的な要素は抜け落ちるどころか、はつきりと存在している。総じて与える印象は、男勝りの美少女といったところか。性格の面で男子の注目を一点に集めることはないが、黙ってさえいれば誰しもが目を奪われるものだろう。

「むっ…、その君。人の顔をじろじろ見るとは失礼じゃないかね」

ハマちゃんとの会話を切り上げ、自分の座席に向かい座った。すると、先ほど私のことを凝視してた人が丁度横になる。だから、そうやって文句を言うのと同時にどんな奴なのか知ろうとした。どうも、礼儀がなっていないようなので、どこぞの社長が目下の人間に向かつて言うような横柄な言い方で。

「あ、ああ…すまなかった。入学式で寝ている同じクラスの子供で、このことで気になってたんだ。ほかのクラスメイトも似たようなものじゃないか？注目してたんだよ。あの担任に叱られる最初の犠牲者ということだ」

ふむー。なるほどなと一人合点する。この男子生徒だけが不躰な対応を取ったわけではないらしい。私も当事者でなければ、野次馬をして面白いものを見れると登場を待ち構えてるだろう。それにしても、この男子生徒以外のほかの生徒はどこ吹く風。焦点がどこにもあっていない様子だ。

「に、しては皆、腑抜けたような顔しておる。それに話題の主が現れてやったというのに、どうして反応がなにもないのか。私には分からないのだよ。後、ついでだ。失礼な対応を取った君の名前を教えたまえ。君だけは唯一関心を持って私を見つづけていたからな。それ自体は失礼で不躰な人間のすることだか」

その当事者が現れたのだから多少は何かしらの反応があったっていいはず。その疑問をそいつ（不躰なやつ）にぶつけることにしてみる。ついでに、名前も聞いておく。さっきの良く分からない社長キヤラは継続したまま。

「…。そのお偉いさんみたいな話し方は何だよ…。まあいいか。

俺の名前は高藤雄貴だ。お前のここまでの対応を見て、多少理解したよ。あの教師が怒らないのも今の俺の気持ちと似たようなもんだろ。呆れて物が言えなくなるってな」

「ぬう…おぬし態度も悪ければ、口も悪いと申すか」

「それは社長というよりも武士だろ…」

「む…。面倒だからやめだ。ヤメ！にしても失礼だなー高藤君は」

高藤と名乗った男子生徒は目つきが悪いほかは特に特徴はない。ヤクザ映画だったら親分に報告しに来るチンピラ…よりマシだけど、偉くはない。その場にいるけど下座にいそう。他に特徴を探そうにも見当たらない。身長も私と同じくらいだし。体重は…高藤が太ってるわけじゃないけど、私は軽いほうだしなあ。多分、1・2〜1・5倍はあるんじゃないかと思う。それは男子の平均になるだろう。私には高藤は目つきが悪いだけの普通の人、そんな風に見えた。

「でも、他のクラスメイトが間抜けた顔してるのはどういうことなのさ」

「分からないのか？」

「わかんない」

高藤が呆れたような顔をする。同時に心の中で色々と私に対する（低い・酷い）評価が決められていつてるのが分かった。少しぐらいその素振りを見せないようにする気はないのか。不快感から自然と膨れっ面になる。それに対して更にため息をつく高藤。喧嘩をうつてるのかと思う。買えるなら買いたい。

「お前が担任を駄目教師呼ばわりしてるのと、それに対して怒りもしない担任が理解できないんだろ？入学式で寝ていてお叱りを受けるかと思ったら、この仲のよさだ。ぽかーんと眺めるだけなのが自然な反応だと思わないのか？」

高藤はこう説明する。でも私なりの理由があるのだ。クラスに来るまで会話した結果、お許しに近いものは得たつもりでいる。自分のことを既に元担任を通して知っているらしく、私の性格と発言内容の傾向に関して了解しているに違いない。それにハマちゃんの性格なら怒らないだろうと判断したからこそ、駄目教師発言だってする。そのことを高藤に説明してやろうとした。

「だって、ハマちゃんいいひとだし。自分だって校長の話の間寝てるっていつてるしさ」

「とはいえ、まだ初日だからな？普通は気を使う。気を使わなくとも駄目教師なんて言葉、間違つてもつかわないからな？いや…仲良くなつても教師とはあんな仲良くなるなんてないだろうし」

「ハマちゃんは元担任の友人なんだよ。私に対する理解もそれなりにあるし、覚悟もしてるから平気平気」

「だとしても、だ。お前の対応はフランクすぎるんだよ。ハマちゃんとか既に呼び始めてるし」

「ハマちゃんはハマちゃんだからいいんだよ。嫌なら訂正してくれっていうさ」

「…その思い切りの良さというか、決めつけというか、なれなれしさが、周りから見たら異様なんだよ。俺がさっきいったのはそういうことだ」

「むー…」

高藤はどっかの教師がいいそうな堅苦しい、一般的な杓子定規で図る話をする。ハマちゃんのがまだ柔軟な対応力がある。当たり前前の話をいつて聞かせようとしてくる高藤は、目つきの悪い堅物のチンピラ風見た目をした、口うるさいお母さんみたいなことを言う奴と心の中で認定する。ここま言い切られるのも癪なので、何かしら一言、いつてやることにした。

「私と同じクラスメイトなら、普通なんかだからなんていうのは、疲れるからやめたほうがいいよ」

「今でも、既に疲れてる。なんで、こんなことで疲れるのかわからんけどな」

「そういうことだから、諦めたほうが楽だよ」

「だから、なんで普通のことを諦めなきゃならないんだ」

もう一度、高藤の小言が始まりそんなタイミングでハマちゃんの声が教室に響く。

「早瀬。高藤。周りがうるさそうにしてるぞ？話すならもう少し声を小さくして話せ」

「む、ハマちゃんが言うなら仕方ない。高藤。文句があるなら小さい声でいうのだ」

「なんで、そこまでしてお前に正論を言って聞かせないといけないんだよ…」

疲れたように首を振る高藤。そこでようやく気がついたのか、周りは既に固まった状態から戻っていた。このタイミングまで話に熱中して分からなかったようだ。それを鼻で笑うと高藤が憎たらしそうな目をこちらに向けるが、知らん振りをして通す。私が一言言う時点で、既にホームルームが始まっていることに気がついていなかったらしい。

この後は、高藤も静かになりすることがない。委員会に入るつもりもないため、机に伏せて寝ようとする。最前列で教卓の目の前というポジションではあるが顔を机に伏せた。

「ということ、保健委員は霧崎と早瀬だ」

すぐ寝れずに机に顔を伏せていただけのため、自分が保健委員に指名されたことで跳ね起きる。

「ハマちゃん。寝てる人を委員にするなんて酷いと思います」

「早瀬。悪いが何かしらの委員に所属しなきゃいけない決まりな
んでな。保健委員の人数が足りないから任命した」

「…ぐ。それならば仕方ない」

（まあ、全員がなにかしらの委員に所属する必要はないんだがな）

私は仕方なしに保健委員となった。同じ保健委員の顔も分からないが仕方ない。ホームルームの間、机に伏していた代償は保健委員になるというものだった。どうやら、高藤が私でも問題なくできる委員会を私にやらせようと発言したのがきっかけだったらしい。それにハマちゃんが便乗してめでたく決定したようだ。そんな話を私
がハマちゃんに囁み付いて文句を言おうとしたときに、周りが話しているのを聞いた。それと寝ている間、聞き流していたクラス内での会話内容と併せて考えれば間違いなさそうだ。

本来なら、こんなことは許されるわけがないけれども、ある熱烈な支持者が若干4名いたために採用された。ハマちゃんと高藤と霧崎と元担任^{テラダ}。…寺田が去年の意趣返しを行って来ることに殺意が芽生えなくもないが、それよりも、霧崎という人間が私を保健委員にしようとするのが気になった。

教室の後ろへ振り向き、睨み付ける様にして霧崎を探す。私の怒りと恨みのこもった目を向けられると視線と外へ向けたり、廊下へ向けたりして目を見ようとしなない。全員がその調子で視線をそらす中、一人だけ嬉々としてこちらに視線を向けている者がいた。

（女子…？それになんかちっこい）

正直な感想を言うなら、小学生がここにいるようにしか見えない。

140cm程度だろう。喜び方も何処か子供っぽい。裏表がないはつきりとした純粋な笑顔をこちらに向けている。自然と睨み付けるような目をも緩み、こちらでも軽く微笑むような顔になる。見てるだけで微笑ましいものでこちらの敵愾心も薄れる、そんな笑顔だった。

（でも、誰か分からないなあ）

そうなのだ。今まで一度も会ったことがない。小さいころに会ったのを相手が覚えていて…なんてことがあるのかもしれないが、こちらはまったく該当する情報がないのだ。腰まで届くようなのポニテールなんて早々いない。それに、こんな可愛い子がいたら通り過ぎた瞬間二度見する。そんな子を忘れるような気がしない。なにせ男が見ても保護欲が沸くようなかわいらしさだ。やましい思いが起ることなく純粋に守りたいと思わせるそんな雰囲気を漂わせていた。

現に彼女に向ける視線が私のほかにもいくつかあって、目を細めて口元は緩み、キュンキュンしているように見える。愛娘をみてデレデレになった頑固親父のそれよりも蕩けてる。

（アイドル体質だなあ。あの子）

本人に自覚はなくとも、周りが勝手に騒ぐ。何気ない動作でファンを着実に増やしていく。親衛隊だってできるかもしれない。そんな感想を覚えたところで体を前に向ける。結局、霧崎つてのが誰だか分からなかった。「顔を見ただけで相手の名前が分かるような能力」なんて持ち合わせていないので当然のことだった。

「これで委員会は決まったな。後はクラス委員だが…やりたい奴はいるか？」

委員会は決まり、後はクラス委員を決めるだけだ。決まれば、すぐ帰宅となる。そのことと、高藤への報復を考えていたことが結びつき、行動へと変える。

「高藤君がいいと思います」

先ほどの仕返しとばかりに、手を上げて、クラス中に聞こえる大きめの声でクラス委員長に推薦する。周りのクラスメイトも文句はないようだ。用は自分以外で誰かがやれば困らない。そうとしか考えていないようだ。と、なれば文句を言うのは一人だけだ。

「おい…勝手に推薦するなよ。俺はやる気ないぜ。俺には向かないしな」

高藤が当然のように推薦を嫌がる。それにやる気ないことをアピールしてくる。そんなこと想定済みだ。

「高藤君はクラス委員長にむいています。先ほどもこの目つきの悪さからでは、想像できないほどのまともで真面目で一般的な生徒の意見を私に説いてましたし、性格・適性ともに問題ありません。近くの方は話していた内容も良く聞こえてたと思います」

「仮に、適性に問題がなくても、クラス委員長になることを強要できないだろ？」

「ええ、できません。でも、寝ていて伏せている私をわざわざ保健委員に推薦してくださったので、私も高藤君に何かを推薦して向いた仕事をしてもらわなければ、私を指名して推薦してもらったのに悪いと思いました。ですから、クラス委員長に推薦しただけですよ」

出来る限り丁寧な口調で、先ほどの仕返しであることをクラスメ

イトに言っただけで聞かせる。周りのクラスメイトも察したのか、高藤がクラス委員長になるのが筋だということを主張する。当然、裏には私を保健委員に推薦した責任と代償を払うべきだ、という意味合いをこめて。そうすれば、自分たちがやらずとも済む、という計算の元に行われた行為ではあったけれどもありがたかった。

「クラスのみんなも言ってるし、やったらどうだ？高藤」

「推薦もいただきましたし、クラスメイトもそういうのであるなら、やらせてもらいます」

ハマちゃんの鶴の一声で事態は決した。常識人の高藤がここで断れるはずもなかった。内心苦りきっているのを顔に出さずに、快諾の旨を伝えるところがなんとも出来た人間だと密かながら感心した。満足そうにしている私にお礼を言いに来るあたりの演技もすばらしかった。おまけさえなければ。

「早瀬さんありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

お互いにおかしなほど丁寧語に力が籠った声を出しての感謝。片言の外国人が話す日本語のように音にオカシナアクセントがあるわけではないが、それくらいになにか裏がある話し方だといえた。お互いの本音が見えそうな喋り方だともいえる。その後握手をする。これが曲者だった。

お互いに固く握手を交わす。それはもう、相手の手を握りつぶすほど強くである。顔には引きつって入るものの笑顔を浮かべ、友好的な雰囲気崩さない。最初の数十秒は互角か、早瀬が多少不利だった程度だったが、時間とともに優劣がはっきりしはじめる。早瀬の握力が抜けていったのか、次第に苦しそうな表情に変わってゆき、30秒も経つころには早瀬の悲鳴が上がっていた。

「ぎゃああああ、ギブギブ！ギブだって！」

「（微笑）」

「ごめんごめんってえええええ、痛いってえええええ」

「許さん」

「折れる折れる！手が折れる！もうしないからあああああ」

「二度とか？」

「（全力で首を縦に振る＋叫び声）」

高藤は謝罪と言質をとったことで満足そうな笑みを浮かべその場を去ろうとする。

（くそー…このまま終わらせてたまるか…）

私は全力で高藤を相手取ることにした。そのためにその場でうずくまり、右手を擦りながら痛さをこらえる振りをする。そして、嗚咽をもらさないように唇をかみ締めて震えてみる。いや、現に痛いし折れるかと思ったよ。でも、いつもならこんなことで痛いのを我慢しない。それにこんな風に泣いたりしない。

いつもなら

「高藤の馬鹿ー。加減しろー。女の子にこんなことする奴なんてるくでもない奴だよ！まったく！男の風上にもおけない奴めー」

といった、悪態についてお仕舞いにする。もしくは2回目の懲らしめを受けて悪態がつけなくなって完全に沈黙するといった形での決着のことを指す。だが、今回は違う。きっかけはどうであれ、途中経過がどんなものでも、最終的に女の子を泣かせたという印象を周りに強く与えるものを選択した。

（悪いね。高藤。後でアイスでもおごろつかな）

私は手を擦りながら、噁り泣きや涙をこらえているといった様子を演じながらそんなことを考えている。周りが先ほどのうるささと打って変わって、急に静かになった女子に心配そうな雰囲気をもし出す。高藤も少し気まずそうにし始める。ハマちゃんは薄ら笑いをしている。

（ハマちゃんは分かってるけど、口出ししなさそうな感じがな）

それを確認したら、静かに泣き始める。大げさにならない程度だが、クラス中の人間が聞き取れる程度の泣き方だ。時々、しゃくりあげて聞こえやすいようにしてみる。周りの注目が集まり切ったあたりで、高藤を非難するようなことを泣きながら喋りだす。（もちろん、痛みを除いて全部演技）

「ひつく…うつ…酷いよ…ホントに手が痛くて折れるかと思ったのに…うつ…」

「いや…その…悪かった。お前が泣くとは思わなくて本気になりすぎた。すまん」

いやー。流石常識人の高藤さんだなあ。すぐに謝罪をする。クラスメイトの非難を浴びる前にすばやく自分の非を詫びる。そのタイミングが完璧だった。過去にはクラス中の批判が一点に集中していて、既に暴言が飛び交い始めているにも謝罪しないやつや、教師が直々に現れて説教するまで黙り通すのもいたのに比べると100点満点中90点は堅い。その後、背中を擦って心配してくれたのも高得点だね。その見た目とのギャップも相まって女子からの評価が上がってるのが分かるよ。うん。

…これは逆にまずい。そのときになってようやく冷静に状況を再検討する。このまま、続けても割りにあわないと判断して切り上げることにした。

「うん…こっちもごめんね。自分でもこんなに痛いと思わなくて、思わず泣いちゃったけど、今は落ち着いたからもう平気」

「そうか…悪かった。お前が女子だって言うの忘れてたから…」

「むー。気にすることないよ。変に女子だって言われるの嫌いだからさ」

「そうなのか？」

「そうだよ。初めは勝って泣かしてやるーってつもりだったんだよ？ 実際。結構惜しかったでしょ」

涙を手でぬぐい、笑顔に変えてそう告げる。嘘のない私のいつもの表情。演技をした時はそのときは本気で泣いているように見えたり、怒っているように相手から見えるらしい。けど、その後でこの顔を見ると泣き顔や怒り顔はどうも似合わないと相手は感じるらしい。（不自然だとは思わないが、似合わないとはよく言われる）現に私は演技してたわけだし。

高藤は落ち着いて元のふてぶてしい性格で話はじめたことに安心したのか、差し出していた手を引っ込める。ぐずるようだったら、手を引っ張って引き起こすつもりだったらしい。素直に高藤を評価しようと思う。目つきは悪いが、性格は気の利くいいやつという評価を追加した。

「なんだ。手を引っ張って起こしてくれないのかー」

「大丈夫そうだしな。それに、差し出した手を引っ張って転ばさせようとしてたみたいだしな」

「ありゃ、ばれてたか。それじゃ、立ちますかね。あー、あと、クラスの皆さん申し訳ない。高藤が迷惑をかけましたよっと」

すたっと、音のするようなハンドスプリング（のようなもの）で立ち上がる。

「おい、俺のせいなのかよ」

「そうさ。女の子を泣かせた高藤君のせい以外になにがあるのか」

高藤が呆れたように首を振ると、席へともどつてしまふ。その顔にどこか安心したようなものが見えた。その様子は私だけしか分からないだろう。それだけ微妙にだが、高藤の目と表情が和らいでいたような気がした。

「それじゃあ、早瀬。このあとで職員室まで来るようにな？」

「なにっ。さっきまで泣いてた生徒ですよ？さっきまで泣いてた！」

「色々と聞きたいことがあるからな。主に、入学式で寝てたことについてだな」

ハマちゃんが無情な宣告をする。どうやら、入学式のことは水に流してくれなかったらしい。助けを求めてクラスを見回しても、助けてくれる人も居ないようだ。逃げられないことを認識する。ホームルームは終わり、もう帰宅するだけだと意気揚々と鞆を横に置き準備をしていただけに、落ち込む幅は大きい。無駄だと分かっている、聞いてみることにする。

「明日に回すことは出来ませんか？」

「無理だな」

「…そうですか…」

…ホームルームを終えた後、みんなが思い思い帰宅してゆく中、私だけは職員室へ向かうのだった。

うるさいアイツとちっこいの

やっぱりあの人だ。間違いない。遠くの方で走ってる姿しか見たことはなかったけど、教室の後ろを振り向いている時に顔を確認したら、決して見間違いなんかじゃなかった。だって雑誌で見た写真とまったく同じだったもん。ここの付属だということは、競技会で走るときのユニフォームで分かっていた。でも、競技会であんな記録を出した選手なんだ。他の有名スポーツ校なんか、スポーツ推薦で入学しているとはかり思っていた。

一部の陸上雑誌では、「超新星現る」「日本女子長距離界エース候補」なんて特集を組まれたりするような選手なんだ。強豪じゃない普通 通 の進学校の内部推薦で進学しているなんて意外だった。コーチ・設備・教育指導…優良な環境でこそアスリートは成長する。日本一、いや、世界だって狙える素質が彼女にはある。有名校からお呼びが掛からなかった…なんてことはありえない。分からないけれども、どうしてもこの学校にいたくちやならない理由があるんだ。それで、内部推薦を選んだ。

冷静に現状を再確認 ― 当たり前前のことを改めて確認するだけのことを― して、ようやく憧れの人がいることを認識することが出来た。認識できた途端、単純な喜びで私の体中いっぱいになる。一目惚れした人と同じ学校。同じ教室で。同じ時間を過ごせる。これ以上うれしいことがあるわけがない。

ジュニアの競技会で見かけてから3年、毎日のように思いをはせていた。クラスの友達がアイドルグループのAR。SHIの誰某がカッコイイとか憧れるという感覚と似ていた。…誰からも同意を得られないだろうから話したことはなかったけど。トップアイドルに憧れるのと同じ感覚なら、一緒に教室にいられることがどれだけのことか！もうどうしようもないよ。だって、うれしすぎて顔が酷いもん。どうしようもなく顔が緩む。電話で病気で親が倒れたと連絡

を受けても、この顔が直らないと思う。それくらいに喜ばしいことなんだ。

（以下、さらに思い入れを回想中）

（中略）特集が組まれた雑誌は2冊買って保管用と観賞用にしてる。…自分でも気持ち悪い人だと思ってる。でも、仕方ないんだよ。アイドルなら許されるのにどうして陸上選手だと駄目なの！？女子選手に女子が憧れちゃ悪いのか？。そんなことないよ！不公平だよ、不公平！って…あ、あれ？ホームルーム終わってる。…早瀬さんは？…人だかり？なんでだろ。私の机の周りに人がいる。………！！！！

―「あ、あの！なななな、なんですか！な、なんででしょうか！―

後ろの席で私を見てニコニコしてた（と思われる）ちっこい子が机の周りをファン（親衛隊候補生）に囲われてる。あまりのことでワタワタして言葉が出ない。慌てているせいで動きが「急に人ごみの中に放り込まれたりスとかハムスター」みたいになっている。動作がいちいち可愛いってのも罪みたいだね。いまの慌てっぷりでファンの心をつちりつかんだよ。間違いなく。大変だねえ…人気者ってのも。っていつてる場合じゃない。ハマちゃんに叱られてきますか…。

ちっこい子を遠くから観察したい気持ちを抑え、ハマちゃんからのご指名を消化しに職員室に向かうことにする。足取りが重い。精神状態が体を与える影響は大きいらしい。鞆（何も入ってない）が5kgくらいある気がする。足も鉄下駄（2kg）つけた位には重い。これは無理だ。保健室でやすm

「馬鹿なことやってないでさっさと行けよ…」

高藤が私の様子を見て、辛辣な言葉を吐く。言葉自体は（比較的）普通なのに言い方がとげとげしいよ。地味に心にグサツと来たので大人しく職員室へ向かった。教室から歩いて5分も掛からない。職員室は校舎の2階、丁度東校舎と西校舎の境目に位置している。学生諸君がいつでもすぐに来られるようにと、教師たちの優しさが感じられるようなつくりになっている。ちなみに中等部と高等部の職員室は隣接している。ただし、隣接しているだけであって中はつながっていない。それでも、学生なら誰でもこの2階の通路は通りたかないものである。なにせ、中等部と高等部、あわせて数十人がここに集まる。それだけでも十分倦厭する理由になるが、原因はそれじゃない。

っとその前に…西校舎に中等部の教室。東校舎に高等部の教室があり、4階は家庭科室等々、中高共通で使用する教室がある。それです。その2階の職員室エリア西端には中等部の生徒会室、東端には高等部の生徒会室。これがこの2階職員室前を通るのがためられる最大の理由。どう面倒かは一度生徒会役員に捕まればわかるよ。ホントもう…ふえー…zzz

「早瀬さん！いい加減にしてください。あなたは何度言えば（略）
「・・・zzz」

1、つかまると、問答無用で質問攻め・お説教されます。

「担任に呼ばれてきたんだ。もう行ってもいいかな」

「そんなことより、以前にも言いましたが（略）」

2、教師の呼び出しを「そんなこと」で片付けます。

「職務熱心なのは素晴らしいことだけどさ…流石にもうやめにしない？」

「いいえ、早瀬さんあなた だけ は警告だけで済ませられませんか。生徒会役員共々、頭を痛めています。中等部のときから何かと問題ばかり引き起こしてますし、とうとう、高等部に進学しましたし、少なくともあなただって入学する ま で は 優秀な人間だったわけですし…」

「入学当初から私は変わらないって。受験以前もそうだしさ。たまたま、縁があつてここで勉強してる。それだけだよ」

「何を言ってるんですか。東鴻高校は、中学・高校受験ともに最難校に位置づけられています。それに合格した時点で一般的にもエリートだつて言われていますよ？縁があるから合格できるような問題じゃなかったでしょう。その難関を通り抜けてきたという自覚をもってもらわないと困ります」

(…どうでもいいなあ・・・ほんと)

3、自尊心が強すぎます。学校に対する思い入れも強い。エリート意識()

特に、生徒会の面々はその傾向が強い。呆れるくらいに。(驕るからには)それ相応の学力をお持ちです。おまけにどうも他の生徒を下に見る傾向がある気がする。こんなに露骨に言ってくるのは私の時だけ。(他の生徒の場合は担任が生徒と個人面談する時みたいな会話になる)なんて面倒な人たちだろうねと心の中でため息(と、愚痴)をつく。

「さて、今日のお説教はそんなものでいい？」

「待ちなさい。まだ終わってないわ」

終わりそうもない会話だと見切りをつける。その上で鞆から一枚の紙を取り出しておく。

「ほら、もう忘れたの？元・中等部生徒会長 天竜 葵さん」

てんりゅう あおい

右手を突き出して、相手の顔に押し付けるようにして見せる。いつ振り返ってみても、こんな紙のためにばかげた勝負を受けたと思ってるよ。結果的には、この紙のおかげで中等部にいる3年間の間、のんびり出来たわけだ。今は感謝もしている。

突き出した紙に書かれている内容はこんなものだ。

早瀬 遥 殿

誓約書

1、私は学内にいる場合や私生活において下記の行為を行わないことを誓います。

- 1) 生徒会室に呼び出しを行うこと
- 2) 生徒会権限により、罰則やその他の処罰を行うこと
- 3) 間接的な嫌がらせや、第3者を介しての報復等の行為
- 4) 今回の勝負に対する不平や不満を他人へ漏らすこと

2、私はいかなる場合においても貴方を支持し、かつ協力することを誓います。

3、上記のほかにも、生徒会役員・教師の懐柔に常時勤める。加えて、3つだけどんな命令でも従うことを誓います。ただし、この命令は強制力は持たない。しかし、命令に従わなかった場合は以下

のことを行います。（3項の有効期限は高校卒業までのものとする）

- 1）一人称を「私」ではなく「葵」にする
- 2）二人称を「あなた」ではなく「くちゃん・くん」（教師も同様）と名前で呼ぶ
- 3）通り名として「ブルードラゴン」を名乗ること。
- 4）語尾をぶりっ子風にする。

どうしても出来ない場合は一度5mmの坊主にすること

（以下 日付 誓約者名 印鑑 住所）

第一項の「生徒会権限による処罰」と「生徒会への呼び出し」さえ封じ込めればよかった。後はおまけだ。なにせ、この東鴻高校（と、中等部）は生徒会の判断で罰則を与えることが出来る。内容は学校の草むしりやごみ拾い。酷いと校内全てのトイレ掃除くらいは普通にさせてくる。1年間、雑用（種類問わず）も聞いたことがある。いずれにせよ、罰則が割と重いため生徒会の機嫌を損ねるようなことはしないほうがいい。そうでなくとも、廊下を走っただけでお説教30分なんていうこともあることだし。

流石に停学処分や退学といった判断は教師がするとはいえ、それに近い厳罰くらいは与えられる。それが生徒会が生徒から恐れられている理由だ。出来る限り、生徒会の役員と関係を持ちたくないのが一般学生の気持ちというものだ。

（私はこの誓約書があったからなんとかやってたけどね。もう期限切れかな）

法的拘束力がなにもなくとも、真剣勝負の証明書みたいなものだ。

見た瞬間に中等部元生徒会長の顔が変わる。物分りが良くて結構です。そういう反応の速さは嫌いじゃないよ。

「な、何を私にさせるつもり？」

「いやなにも。もう生徒会長でもないし、この紙も要らないかなと思って」

と、言いながら紙を四つ折りにして渡す。

「え…？」

「はい。後は好きにしていよいよ」

そういつて、手に握らせた後、職員室に向かうことにする。正直なところを言えば、ことあるごとに私に食って掛かる会長をこの誓約書を見せて黙らせる。もうこの関係に疲れていた。。当初は面倒事から逃げられると喜んでいたものの、日がたつにつれ他の生徒に對して不公平だなと思い始め、会長さんがこの紙を見るたびに苦い顔をするのがなんとも心苦しく感じていた。

風の噂によると、原因は冗談で書き足した「3回まで何でも言うことを聞く」と言う一文のを会長さんが本気にとってしまったことだというから、滑稽な話。こちらとしては何か要求するつもりなんて初めからなかったし。（元々は会長さんが私の態度が気に食わないから突っかかってくるようになったのが始まり。その後、ややこしくこじれて難題を投げかけてこられる羽目になる）

条件が「何でもいいから日本一の記録」なんて無理難題だったため勘違いも生まれたんだろう。それもこれも中学までの話。3年も経てば時効にもなる。記録作するための努力に見合う対価を払ってもらったし、もういいかなという気分。説明するのも面倒だし、いまさら言うのもややこしい。適当に手を振って去る。

「じゃまたねー」

「…」

目を丸くして見送ってくれる会長さん。私があなただにいえるのは元から脅すつもりもないし、恨んでもない。同条件で真剣勝負（賭け？）できる相手を嫌えるわけがない。余計な取り巻きとか、うるさい後輩がいなければ会長さん自身はいいやつだなーって評価してる。破滅的に説明するのが嫌いなだけだよ。っと思いつつ一言も出さずにその場を去った。

「で、遅くなったってわけだな？」

「え、ええ。そうなんです。嘘みたいですけど本当なんです」

ハマちゃんが三十分近く待たされてご立腹の様子。教室でのぐだぐだと軽いお説教で大体それぐらい経っていた。あなたは怒ると怖いので許していただきたい。いや本当に…。心から誠意をこめて頭を下げながら経緯を説明して謝罪する。

心は伝わるのか。ハマちゃんも納得した様子でお怒りを収める。普通に阿修羅かやく。さんぐらい怖い顔つきしていたよ。これで古典だというのだから本当に無駄。人は見た目じゃないんだね。うん。

「遅れたのは許すが、本題は終わってないからな。後、無駄に怖い顔とか考えてるだろ」

また顔つきが険しくなった。後、心が読まれたのか顔つきがさっきより恐ろしげになってますよ？お願いですからその鬼面をはずしてください。その顔はそのまま鬼瓦になっていても通用する出来栄えですから…。心で祈るようにしながら、顔と目で謝罪を請う。

「ま、別に叱るつもりはない。こういう振りをしとかないと生徒が真面目に答えないからな」

「あ、実もふたもないこといいますね…」

「でも、早瀬には無駄みただからやめた」

「恐怖してましたよ、その顔に」

「恐れ慄いている割には、余裕だらけで恐れ入るところがない」

「…ソウデスネ」

「それに、最低限の敬意は払ってるみたいだな。そういうものだと思つて応対することにした」

そついうと、鍵を渡してきた。

「？」

「科学室の鍵だ」

「どういうことですか？」

急に渡された科学室の鍵。理由が理解できずに尋ねる。

「明日教科書を配るんだが、その準備を科学室でする。それで今回の爆睡はお咎め無しだ」

「いやです」

即答だった。無意識のうちに拒絶反応を示していた。

「ほう、それなら一人でやるか？」

「やらせてください。あと、一人は勘弁してください」

即答するしかなかった。理性がこの教師は本気で一人に丸投げする人間だって告げていた。負い目もあるし、それ以外に答えなんて

初めからなかったんだと答えてから気が付いた。

「それで、やり方はどうしたらいいでしょう？」

「行けば張り紙してあるから、その通りに置いておけばいい」

「…あれ、ハマちゃんは？」

「行かんぞ？」

「…」

初めから、一人だったのか…。完全に謀られた。文句の1つが言える立場ではないので、諦めて科学室へ向かう。出来れば1時間以内に終わる仕事だといいなと願いつつ、呆けた心で歩く。後ろのほうから、

「もう一人は先に科学室にいつてるから急いでいったほうがいいぞ。早瀬が来るのがあまりにも遅いから、教室に確認しにいった。そのときにこの雑用を頼んだら手伝ってくれるそうだ。有志で手伝ってくれているんだからな感謝しとけよ」

と、聞こえてきた。一応、一人でやらずに済むらしい。ただ、一人でさせるつもりだったらしいことはよくわかった。

階段を上り4階へ。足取りは重く、教室を出た時よりも2kgほど加算されていた。○と千尋の神隠しに出てくる。なしみたいな重い足取りだった。

「とーちやく…うえ…」

待つてる人を探す。一声かけなくては思っていた。わざわざ自発的に、こんなやらなくてもいい作業を手伝ってくれる人なんだ。ありがとっの一声をかけてから始めるべきだろうなと考えていた。だけでも、そんな考えがどっかにあった。

「誰よ。手伝い人…」

科学室前は人だかりが出来ていました。しかも、同じクラスの人です。人数は10 15人？男子ばかりです。なんでこうなってるのさ。あ、これ…。あのちっこいこの親衛隊員っぽい？だったら、手伝い人あのこか。

大体、現状把握が出来たので止まっていた歩みを再開する。あの異質な状況に飲まれそうだった。けれど、考えればそうなる原因ひとつしかなかったね。初日にしてこんなファンを作り出すあの子のおかげで、仕事が速く終わりそうでよかったなあ。

…

……

……

……………

ねえ

なんで進路塞いでるの？何でこっち睨み付けてるの？通路塞がれるって学校生活の中でありえる現象なの？その両手で人のことを押し突き飛ばす行為。割と痛いですよ？男子だったら間違いなく殴られてる状況みたいですよ？

(…駄目だこいつら…既に狂信者の域に達してるよ)

頭を抱えなくなるのを何とか放っておいて、あの子を呼ぶことにする。

「えーっと…うちのクラスの背が小さいあなたが手伝ってくれますか？」

親衛隊員の目が全員こちらに向く。全員の目に「男子だったら殺してる」「もう一回ふざけたこというと女でも容赦しねえ」なんてヒツドイ思考が見て取れる。冗談はほどほどにするべきですよ。確かにあの子可愛いけどさ。それでもこれはやりすぎだって。

「あ…。は、はい」

声をかけると、返事とともに人垣から出てくる。周りの人間は流石にちっこいこの行動を制限したりはしない様子。それしたら、ハマちゃんに報告しようかなと思ってたよ。ハマちゃんの教育的指導をしてもらえばすぐに考えも改めるだろうし。（ハマちゃんの教育的指導なんて、見たことも聞いたこともないけど、イメージは出来るので）

それで肝心のあの子は、完全に周り為何のためにいるのか理解してない様子。涙を両目に湛え、ふるふる震えていた。下手なことしたらすぐにでも泣いてしまいそうだ。下手な動物の子供より可愛い私にとっては生まれて数週間の子猫といい勝負じゃないかな。普通の人間ですら人の根本をグラつかせるなにかがある。

「それじゃ、お願いしていいかな？」

「は、はい」

「んー。私は早瀬 遙って言います。お名前教えてくれるかな？」

自然と言葉遣いが小さい子に対するものになる。言うてから、不味ったと内心あせった。同学年って分かっていたけれど、見た目にひきづられる形でこんな言葉遣いになっていた。…直さないかね。

「わ、私は霧崎 綾乃あやのっていいいます。ふ、ふつつかものですがよろしくおねがいします」

「綾ちゃんそれは嫁入りする時に言う言葉だからね。慌てすぎだつて。何も慌てることなんてな…くはないか」

間違えるにしても、ベタな間違えをしてくる綾ちゃん。この子の心が落ち着かない状態を元に戻して、早いところ作業をしたい。初日から遅くまで作業なんて嫌過ぎる。欲を言うなら、仕事をしないで家に帰りたい。手段はもちろんあの男子群を働かせて、自分たちだけ先に帰るというものだけだ。

「んー…この周りの人は？」

「そ、そのなんだか一緒に手伝ってくれるそうで…」

「おー、それはうれしいことだね」

ありや、あの涙目は怯えて泣いてたわけじゃないのか。涙の意味はいまいちわからないけど、それなら話は早い。ちよつと綾ちゃんにこっちに来るように誘導する。周りと距離をとり、聞き取れないように顔を近づけて小さな声で喋る。

「綾ちゃん、お願いあるんだけど。いいかな？」

「私にできることならなんでも！」

「そんなに力まなくてもいいって」

妙に力の籠った返事をする綾ちゃんに少し驚く。これだけ元気なら問題ないか。怯えてたら、出来ないかも知れないけど、この様子ならほぼ間違いなく出来そうだ。

「それじゃ、あの男子たちをお願いしてもらってもいいかな」

「何をでしょうか？」

「ん、科学室は狭いし、こんなに人がいても仕事がつらくなるだけだから、教科書配布の準備をしてもらっておいでもいいかなっ

て」

「でも、これは早瀬さんが始業式で寝ていたことに対する罰だつて…西田先生が」

「女子より男子のが重いもの運ぶなら向いてるしねえ…それに、あの男子たちは手伝いたくて仕方ないみたいだし譲るべきかと」

「早瀬さんがやらないと…駄目じゃないでしょうか」

「綾ちゃんは厳しいなあ…でも、この後すぐに用事があつて…」

(まったくないけどね…)

「もしかして、練習ですか？」

「ん？」

「いえ、早瀬さんみたいな人はこういう日は特に力を入れて、何処かで自主練しないといけないのかなと思ひまして」

「あれ、私のこと知ってる？」

内部進学の間は一心、終業式の日に表示されたりしたこともあつて、私のことを覚えてる人もいる。でも、綾ちゃんは外部入学者もとい、高校入試を受けて新しく今年から入学してきた人だろう。そんな人が私を知っていることは少ない。

「知ってるもなにも…知らないわけじゃないですよ！」

「んにゃー…マイナーだから知らない人のが多いって」

「でも、何年ぶりの日本ジュニア女子5000mの記録更新者で、ジュニアにして14分台に乗せる記録をはたきだしたんですよ？14:58:55現日本女子記録と5秒弱しか変わらない好タイムで。しかも、何処か有名なコーチの指導を受けているわけでもなく、全部自主練だけでここまで記録を伸ばした。そんな人なんてどこにも居ませんよ。言っちゃ悪いと思いますが、東鴻高校の設備ははつきりいって最低ランクでしかありません。周辺も走りこみが出来

るような環境はありませんし、コーチはもちろんずぶの素人しかいませんし。男子の中に練習相手がいればまだいいのですが、男子の記録を見ても同じ練習をこなせる人がいませんでした。むしろ、早瀬さんに引つ張ってもらってるんじゃないかって思わざるを得ません。そんな環境にもかかわらず、この記録なんです。知らない人間がいるのなら、そっちのほうがおかしいんですよ！」

先ほどの弱気な様子とは打って変わって…早口でまくし立てる綾ちゃん。完全にその勢いに飲まれた感じがした。私のことを言っているにも関わらず、なにやら説教をされている気分だったよ。それがなにやら、必死に自分の子供を守ろうとする猫や親鳥の奮闘している姿を思い出させる。他の人間が、あんなこと急に言ったら驚くか、引くか、あっけにとられるかするはず。でも、綾ちゃんは最終的に可愛いでまとまるあたりが不思議である。本当に不思議だ…。

「ふふっ。ありがとう…かな？」

「あ…いえ、そのすみません。早瀬さんにこんなこと言っても仕方ないのに」

「あー、その早瀬さんってのはやめてほしいな。早瀬って呼び捨てにするか、遥って呼ぶか。もしくは他の呼び方で。さん付けは気持ち悪くて、嫌なんだ」

主に、会長さんがさん付けしてくるのが原因だった。生徒会役員の面々は全員「早瀬さん」って呼んでくるから、この呼ばれ方に良い印象がない。後は、教師も早瀬さんって呼ぶか。仲のいい人は遥っていう気がする。たぶん。…綾ちゃんとはなんか長いこと付き合うことになりそうだし。

「で、でも、その早瀬さ…」

「はい、ストップ」

「…」

「は、遙さ…はる…はる…はるん…」

「ま、いつか。今日はあの男子にお仕事お願いしてどうかかけよ！後、私の名前呼ぶ練習ね！」

「え…？」

「はい、行く行く」

「あ、あう」

背中を押して、あの男子たちの前まで進む。何を言おうと、勝手にやってくれるのは間違いない。後はどれだけ快くやるか、という程度の差だろう。

「あ、あの。皆さん」

綾ちゃんの一声で全員が顔を向ける。私たちが何を話していたのか気になるところだが、今はこの天使（綾ちゃん）の言葉を待っているらしい。

「わ、私はその…今から…遙…と行かなきゃ行けないところあるから、代わりにお仕事お願いします。も、もちろん、申し訳ないと思ってます。で、でも、どうしても行きたくて。お願いします…」

うー…どうだろうこれ。半分くらいが優しい目で見守ってくれてるけれど、残り半分がすごい怖い。100点満点で評価するなら50点だなあ。後が少し怖いかも知れない。

「ああ、気にしないでいいよ」「行ってくるといいよ」「初めから代わりにやるつもりだったから」

という、好意的な反応が全員から返ってくる。が、半数くらいの

目がね…形容しがたい。顔は笑って、目も笑ってるけれど、黒目が笑ってない、といっておく。しばらくは綾ちゃんに助けてもらわないと、と心にメモしておく。

その間に私はひっそりと姿を消して、下駄箱へ。靴を履き替えて待っていると綾ちゃんの階段を降りてくる足音が聞こえる。トテテと音が鳴りそうな雰囲気です。私の前までやってくる。

「靴。履き替えてないよ？」

「あつ…」

自分の下駄箱まで戻って、急いで履き替えようとする。慌てているため、危なっかしい。そばまで行き、手を綾ちゃんの頭に載せる。ぼむぼむと、二・三回頭を軽くなでる。

「急がなくていいから。今日は親睦会だよ。もっと普通にしていればいいのさ」

なんか、危なっかしくて見ていられない。手を引っ張ってあげなきゃいけない気分になる。それに、なんだか私に変な幻想抱いてるんじゃないかなって心配でもある。友達、になれるといいかな。今日のところは。

「準備できました！」

「ん、じゃあ。出かけますか」

まー…明日が怖いといえば怖いんだけど。作業しないで済んだし、多少は仕方ないか。微妙に心配事が増えて気はするものの、あえて気にしないで寄り道することにする。

会長さんの小話

意外だった。彼女が私のことを許してくれたなんて。中部部にいる間は、いつも私のわがままで彼女に迷惑をかけていた。食って掛かるにしても、ほとんどいわれの無いようなことばかりだった。名目だけになっているような「携帯電話の持ち込み禁止」とか「屋上の使用禁止」といったものばかりだ。

いつ考えても情けないと思う。何でこんなことをしていたのかといえば、自分から挑んだ勝負の結果に納得できなかったからだ。出来るはずもないとたかをくくっていた。それに、「勉強は出来てもスポーツなんて出来はしないだろう」と思い込んでいた。

そんな計算のもと、私は彼女に「どんな競技でもいいから県大会にでてみなさい。もし、出来たなら何でも言うことを聞く」という馬鹿みたいなことを言い出した。今一度、冷静になって考えると恥ずかしい。その挙句の果て、いざ彼女が事を成すと些細なことで校則違反だのなんだのを言うようになっていた。

…いや、自分のことだ。取り繕うのはやめよう。

私は東鴻中等部の入試試験で彼女に負けた。そのことを知ったのは入学して数日後。

知るにいたった原因は、教員が「入試試験で全教科満点で入学した人間がいる」といつていたことからだ。初め、私は自分のことだとばかり思っていた。その程度には実力も自信もあった。いくら難問だと呼ばれていても、中学入試の問題なんて解けないわけがないと驕っていた。

その当時の私は「絵にかいたように秀才面して増長した嫌な奴」だった。

でも、その満点入学者は私ではないと気が付くのは、職員室の前

を通った時に聞いた言葉だった。

「まさか、全教科満点の生徒が2人もいるとはな」

「それには私も驚きましたね」

「しかも、片方は文字通りの全問正解ときた。俺の大学入試の問題も難なく回答してた」

「私は本当にどうでもいいことを答えにしてみたんですが、駄目でした」

「何を答えに？」

「この問題冊子の中に出てきた「あ」という文字の数」

「それは、問題文にしているのか？」

「各教師の判断の元、自由して構わない。いわばおまけみたいなものらしいです。この問題は採点対象にはない旨が問題冊子にも書かれています。単純に早く終わった生徒の暇つぶしや、教師が出来を見て楽しむためにあるものですから、いいんじゃないでしょうか？」

「うむ。そうだな。それでその答えはいくつになるんだ？」

「ルビや隠し「あ」を含めて57個です」

「暇だったんだな。その生徒も」

「みたいですな」

その難問・奇問を全て正答をだされたことが悔しいのか、来年からはもつと難問にするだとかを教員同士で語っている。どうやら、その満点入学した生徒はこれのおまけも全て全問正解だったらしい。私はその問題にも全て回答していたが、正解しているかといわれると自信がない。それに、採点に含まれないのなら気にすることもないだろうと放っておいたものもある。しかし、

『私よりも優れた成績を残した生徒がいる』

その一点が私にとって許せなかった。たとえ、取るに足りない付け足しの問題に対してですら。

みっともない。3年経った今なら言える。しかし、当時は大真面目だった。それが自分の中で唯一の誇りだった。自分を守りたくて必死だったのかもしれない。「誰よりも勉強が出来る」それがなくなれば、私には何もないような気がして怖かったのだらう。

教師の会話は続いた。その中で、出てきた名前が「早瀬 遥」と「天竜 葵」だ。教師の話の流れから言うと、早瀬という人間が全問正解を果たしたらしい。私はどうにかして、彼女に勝ちたかった。その中で思いついたのは公開模試で順位を争うというもの。そこで勝てばいいのだと思っていた。

翌日、担任から早瀬のクラスを聞くことにする。表面的な理由は生徒会役員に誘いたい、ということにした。東鴻高校では生徒会役員選挙が9月に行われるが、それ以外の時でも一般役員の募集はしている。そのお誘いをするという意味合いであった。

「1 - 5組に行けば分かると思うよ。背が高く長い髪が特徴的だから」

その言葉を受けて、昼休みに1 - 5組に向かった。教室に向かいながら、どうやって勝負を挑めばいいのか考えていた。どういう風に話しかけて、いかに弱みを見せず、かつ自然に争うべきか。その算段をするので精一杯だった。手段がまともなぬま、教室にたどり着いてしまう。扉に手をかける。

（いいわ。あいつだって私がどうしてきたのかぐらいはわかるでしょ）

全員が自分と同じで、一番になることに執着してと思っていた。少なくとも、優秀な人間だと自負するのが当然だと信じていた。扉

を開ける。なかには泣いてる女子生徒と、周りから白い目で見られている男子生徒がいた。

「えっと…。何があったんでしょうか？」

先ほどの考えも何処かへいった。出てくる言葉は疑問の声。泣いている女子生徒が例の早瀬という人間らしいのはなんとなく分かった。ロングストレートの黒髪から見てそうだろう。女子にしては大柄というが、今はどう見てもそんな雰囲気はない。そばにゆき慰める女子生徒よりも小さく、か弱く見える。顔は手で覆われているため見ることは出来ない。この涙声で相手を痛烈に批判する様子からも、泣いてはいるのだと思う。そうは思うが、出てくる言葉が酷い。

「愚図…無能…下衆…無頼漢…玉無しの役立たず…」

ところどころにそれに近い言葉が混ざっている。しかし、それと言う人間は清廉潔白、そんな言葉を言った人間に見えない。どういった話法を用いているのかは分からないが、精神をえぐる言葉をこれだけ綺麗に使うところを見たことはない。

言われた相手はというと、顔を真っ赤にして怒ってはいる。それでも、クラスメイトの視線が四方から体中に突き刺さっているため、身動きが取れないといった様子だった。そんな状態のときに私が教室の扉を開けたらしい。

『早瀬さんが嫌だって言うのに、竹内君がしつこくクラス委員長やれって煩いからこうなった』

と、聞いた話をまとめるとそうなる。話だけ聞けばなんで泣くに至る経緯が理解できないが、周りの様子を見る限りではごく自然に

泣かせたようだ。こんな状態ではどうしようもないので、事態の収拾に努めることにした。

「竹内君。あなたは早瀬さんに謝ったの？」

「謝るわけないだろ。何にもしてないし勝手にこいつが泣いたんだよ」

「そう。でも、周りのみんなはあなたが泣かせたって思ってるみたいだけど？」

「何もしてないんだから、謝る必要なんてないだろう！」

「あら、それなら謝らないつもり？それは残念ね。可哀想だけどそれじゃ仕方ないわ」

わざとらしいほど肩をすくめてこの場を去るそぶりをする。

「何するつもりだよ」

「私やクラスメイトが言って無駄なら、担任呼ぶしかないじゃない？面倒だけど」

担任を呼ぶと聞いて焦る竹内。たしか、この教室の担任は体育大出身と聞いている。こういったことには割と口うるさいとの噂だ。呼ばれたら何かと大変なことになるのだろう。目に見えて態度が大変人しくなった。

「それはやめろよ。俺と早瀬の問題だろう」

「無関係じゃなかったの？何もしてないとか言ってたじゃない」

「それはそうだけど。というか、お前誰だよ。関係ないのに勝手に話に入ってくるなよ」

「一応、用事があるのよ。ま、それはいいから、さっさと謝ったらいまなら、クラスメイトも担任呼ばないで済ませてくれるみたいよ？」

やんわりと周りの代弁して訴えかけてやる。担任を呼べば解決はするものの、そうなると関係のない生徒にまで飛び火するのが目に見えている。そのため、担任を呼びに行く生徒がいなかったようだ。そんなこともあり、睨みつけるだけで話が進まない状態だった。

しかし、私が軽くけしかけてみると竹内はあっさりと折れてきた。

「早瀬…ごめん」

「…」

早瀬はすぐには答えないうた。その代わり、罵声をやめて、顔をぬぐったりしている。

「こつちもごめんね？ 泣いたりするつもりなかったんだよ。泣いたばかりに、竹内君悪者みたいにしちゃって…」

「あ、いや。うん。俺が悪かったよ…もっと気を使うべきだった」

目に涙を湛えてはいるが、精一杯の笑顔を作って笑いかける早瀬。その上で、逆に謝罪をする。その様子に押されるようにして竹内は重ねて謝罪の言葉を口にする。さっきまで、あれだけ酷いことを言っていたとは思えない変わり身の早さだが、特に誰も疑問に思わならしい。誰しもが、あんなふうに泣かせてきた相手を許すなんて優しい人だなと評価しているみたいだ。

仲直りの印に互いに握手を交わす。その姿を見て周りのクラスメイトも安心したのか、思い思いの場所へ去っていく。握手をした際、竹内がなんだか照れているように見えた。浅ましいにもほどがあるがどうでもいいため忘れることにした。

（それで、本題に入らなきゃ…）

と、思い出し声をかけようとする。

「天竜さんだよな？さっきはありがとう」

「え、あ、ああ。どういたしまして」

（あれ、何で私の名前知ってるんだろ）

先ほどの影を微塵とも見せない晴れやかな笑顔をこちらに向けてくる。それに合わせて、先ほどの礼をしてくる。竹内が照れるのも分らないでもない。好意を前面に押し出して、こちらを好きだといわんばかりのものである。顔立ちも目鼻立ちがすっきりとしたシャープなもので、媚びたところや間抜けた要素はない。黙ってさえいれば相手を威圧するだけの涼やかさを持っている。その顔は美しく、完成されたものといった感がある。完成された彫刻のような美しさといえいいのか。

だが、その顔立ちが笑顔によって全てが一転したものになっている。人間味のある柔らかな笑顔で相手の心を緩ませる。男子なら間違いない勘違いする。女子でも見惚れる。そんな笑顔だった。

（あ、危ない。なんか、押されてる）

「あー、そうだ。話あるから、ちょっと来て！」

「ちょ、ちょっと・・・」

そういうと、私の手を握り教室の外へと引つ張り出す。どこに向かうのか分からないまま、引きずられていくと、そこは中等部生徒会室前だった。彼女は迷わずその部屋をノックして扉を開ける。

「失礼しますー」

「あ、早瀬さん。ようやく、やる気になったのね？」

「いえ、違いますよ。推薦したい人がいるのでつれてきました」

…え？

「その人とは！天竜 葵さんです。いやー、会った瞬間ビビッと来たんですよ。このひとならきつといい生徒会長になるだろうと」

「天竜さん？ああ、あなたも確か入試を満点で合格したのよね？それなら、学力は問題ないわね」

「でしょう？それに、性格もなんとというか会長さんっぽいんですよ。さつきもクラスの問題をズバツと解決してましたし」

…ええ？

「あら、そうなんだ。早瀬さんが言うからにはそうなんでしょうね」

「だから、私を買いかぶりすぎですって会長」

「そうかしら…？」

「そうです（きつぱり）」

「でも、良かったわ。良い次期生徒会長候補が見つかった」

「お役に立てて光栄です。会長。それでは私は失礼します」

…えええ？

「あなたも生徒会に入ってもらえとうれしいんだけど」

「約束は果たしましたし、それは言っちゃ駄目ですよ」

「そうね…仕方ないわ」

「それでは」

「ええ、気が向いたら来て頂戴ね？」

「気が向いたら。ですけどね」

…ええええええええええ！！

そういつて、彼女は生徒会室を出て行き、私だけが取り残された。目の前には現生徒会長。今までの会話からいつて、私は生徒会に入らないといけないらしい。それも、次期生徒会長候補として。色々、分からないことだらけで混乱している。なぜ私のことを知っていたのか、何で生徒会室にいるのか、なぜ生徒会長候補にされているのか、なん…

「それじゃ、天竜さん。これからよろしくね？」

「は、はい…」

どうして断らなかったんだろう。今ではそれだけが疑問に思う。疑問に思うだけであつて、実は後悔をなにひとつしていない。生徒会に入つたことも、生徒会長をやる羽目になつたことも、この先、彼女に勝負を挑むことになつたことも。何かと、彼女に振り回されることがあつたり、逆に彼女に絡んだりすることが多くなるのは、この生徒会に入つた事が原因ではあつたが、

（おかげで学校が楽しかつたかな）

と思つている。ただひとつ申し訳なく思うのは生徒会の役員たちのことだ。あの勝負の一件から周りの生徒会役員が彼女に迷惑をかけることが多くなつた気がする。原因は分らないが、役員が彼女に嫌がらせや妨害するような真似をするようになった。そんなことは絶対にしなくなつた。正当な手段で正面から戦う…言葉は変だと分かつているが、戦つていたんだ。

敵対心や対抗心から始まり、彼女を乗り越えて学業で一番になる事が目的だつた。しょうもない私の一方通行な関係だつた。そのうちテストと聞けば何でも彼女に勝負を挑むようになってゆき。大抵は負けて、他の分野でも勝負を挑み直したりした。

そんな一方通行を繰り返していくうちに勝てないことが不快じゃなくなっていた。そんな彼女とのやり取りが面白く思っていた。いよいよにあしらわれたり、たまには追い詰めて学校の校庭の草むしりさせてみたり。そういう関係だった。

そんな関係を維持していたが、たまには大きな勝負をしてみようとやってみたのがまずかった。これがあの勝負のきっかけ。たまには本気でお互いの得意分野で勝負しようということになった。彼女は陸上の5000mのタイムで自己新記録をめざす・私はテストの成績で全教科1位を目指す。

お互いに同じ条件でも良かったのだけれども、学業で勝負したら勝てる気がしなかったのだ。それに私はスポーツはからっきしだ。けれども、彼女には今年から始めた陸上の長距離で勝負してもらうことにした。

今回の勝負は「勝者が何か1つだけ命令をする」ことを賭けて戦っている。内容が内容なだけに、それなりに重いものを命令するだろう。しかし、それは各自の判断にまかせている。

そんな風にあいまいに始まったこの勝負はなかなか決着が付かなかった。彼女は何でも出来る人間だったが、本気で1つのことに打ち込めない体質だったらしい。それが、この勝負がきっかけで1つの事に集中するようになった。そのため、記録は毎回伸びていった。それに負けじと私も意地になって勉強していた。

引き分けが続く、気が付いたころには私たちはおかしな領域で戦っていたらしい。

3年の2学期。それまでは決着が付かず、保留ということとで以前と変わらない関係を続けていた。はじめたのは1年の2学期からだから2年間は勝負を続けていたことになる。

決着が付いた時の勝負は「彼女が記録を14分台に乗せること」

で「私が全国模試で全教科1位」（所謂、駿○模試）だった。今まで、全国模試では1位をキープできていたもののこのごろは流石に苦しい。ミスが許されなかったため、精神が疲れる。それに3学期には決着をつけるためにも英検1級を取得が条件だと提示されたことが重くのしかかっていたこともある。

彼女が言うには

「いきなり14秒台に乗せろっていったって無茶だって…10秒縮めるのがどれだけ大変かわかんないの？」

と、いつになく真剣な顔で10秒縮めることの大変さ語る。それでも、私は気にせずにいる。

「たかが10秒でしょ？どうしてもって言うなら条件変えてもいいけど？」

「ぬ…どうすればいいの？」

「負けを認めたらいいわ」

「…なら、条件変えなくて良いよ。でも、次回は英検1級とってもらってから」

「な、なんで、急にそんな難しいのなんて！わけ分からないわよ！」

「そういうことだよ」

そういつて、勝負条件の確認した時の事を思い出す。そのとき初めて彼女の本気の顔を見た。言葉遣いは変わらないけれど誰も寄せ付けない凄みがある。今まではお互いに同条件に近かったのもあるが、今回はどうやら、よほど理不尽な要求をしたらしい。しかし、そのようすからも今回さえ凌げば勝てるということが分かった。

（で、あの油断だったわけか）

結果は彼女は14分台に記録を載せ、私は1教科だけ2位になっていた。その教科が英語。

模試野結果を見ると、

英語

1、早瀬 遥

2、天竜 葵

3、山田 太郎

・
・
・
・
・
・

となっていた。

(化け物だつて、ホントに…)

敵わないなと心から感じたのはそのときだったかもしれない。片方で日本新記録はたきだして、片方じゃ、1教科だけに焦点当てて満点を出してきた。私は英検1級をとるためには猛勉強しなきゃいけないその教科で1点だけ落とすという、油断が垣間見える結果だった。白羽の矢が立っているというのにそこを落とすなんて格好が悪いにもほどがある。

そう考えると、彼女が校内のテストで毎回低い点数を理由が分からない。練習に忙しくとも、多少の時間さえあればある程度の点数を取れるだろう。

そこに至って、ようやくひとつの答えにたどり着く。

それは彼女が私を立ててくれたという事実だった。

校内じゃ、「武の早瀬」「文の天竜」だなんて呼ばれたりするこ

ともある。そんな、私のメンツのためにあえて点を落としてくれたということだ。

（ここまでされちゃ、怒る気も何も起きなかった。ただ感服するばかりだったなあ）

――　そこまで思い出して、その紙をしまうことにする　――

帰り道の電車の中で、誓約書と書かれた紙を鞆の中へしまった。座席に人が居らず、横から覗き込まれたり、前から見られたりすることがなかったため、まじまじと眺めてしまっていた。思い出があまりにも凝縮されているため、少し振り返るつもりがだいぶ掛かってしまった。

気が付けば、自宅からの最寄り駅だ。少し急いでドアからホームへ降りる。慣れた階段を降り、改札口を出た。歩いて自宅へと向かう。いつものなれた通学路の一部だったが、少しだけ様子が違う。いつも、夕方に帰るときには暗くて見えないが、今日は昼間ということもあってよく見える。

公園に植えられていたアカシアの花が咲いていた。少し時期が遅かったが咲いてきたものらしい。

（遅く咲いているアカシアか…）

そんなものを見たこともあつてか、思っていることが声にでる。

「今度は…友達になれたらいいな」

そんな、会長さんの昼下がりに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3518v/>

あかね色～学校記録～

2011年10月11日03時07分発行